●「赤心」継がん
Dream 五代塾 Godai Juku Sinbun（新聞）
第 14 号
発行：Dream 五代塾
吹田市千里山西 5-14-17
発行責任者：理事長　川口 建

日本史教科書　五代記述を遂に修正
「見直しを求める会」五代の汚名をすすぐ

Dream 五代塾顧問　八木孝昌

関係出版社への要望書送付

令和三年（二〇二一）十一月三日に大阪市立大学同窓会関係者を中心にして結成された「五代友厚官有物払い下げ説見直しを求める会」（代表：同窓会五代委員会委員長・元学長児玉隆夫）は同年十二月と翌令和四年三月に、高校日本史教科書会社五社と『日本史年表』刊行の岩波書店に対して、政府による開拓使官有物の五代友厚への払い下げ記述は事実ではないので訂正を求めるという要望書を五代無実の証拠書類を添えて送った。各社からは「要望事項を検討する」という文書回答はあったものの、それ以上の特段の動きはなかった。

文部科学省での記者会見　発表する児玉隆夫代表（右）

清水書院教科書の記述変更

教科書発行法に基づいて全国で「教科書展示会」が六月一日から七月三十一日の期間中の二週間開催されるが、「見直しを求める会」の関係者が大阪会場へ閲覧に行ったところ、清水書院の『日本史探究』が従来の記述を変更していることが判明した。

従来の『日本史B』の記述が「長官の黒田清隆が同じ薩摩出身の政商五代友厚に、約二〇〇〇万円を投じた事業を三八万円余という不当に安い価格で払い下げようとして問題になった」であったところ、令和五年度以降使用される清水書院『日本史探究』の記述では、「同じ薩摩出身の政商五代友厚の経営する関西貿易社に払い下げようとしていると新聞が報じて問題化した」となっていた。変更されたのは縦線を施した部分だけであるが、従来記述は虚偽であり、新記述は事実である。虚偽の記述が事実の記述に改められたことは一大変更であった。

（もっとも、この変更は不十分である。「ただし、その報道は誤報で、政府の決定した払い下げ先は開拓使の官吏四人が退職して設立する予定の民間会社であった」と付記しなければ真実を述べたことにならない。）

第三次要望書送付と応答

清水書院の記述変更を受けて、「見直しを求める会」は八月一日付で残る四社の教科書会社と岩波書店に対して、清水書院教科書の記述変更を伝えるとともに、従来記述の見直しを求めた。今度は具体的な回答が寄せられた。山川出版社・第一学習社・実教出版からは「記述訂正」の返事が来た。東京書籍からは、「その内容が学会等でどのような評価を受けているかという点などを慎重に見定め、教科書の編集委員会で更新の可否について検討を行う」という《様子見》の回答が来た。

他方、『日本史年表』刊行の岩波書店からは、「編者である歴史学研究会とも相談を重ねてきたが、「歴史学研究会が調査した結果、ご指摘の通り、五代ならびに関西貿易商会（関西貿易社）は、勅裁に関わる史料には登場しないことを確認」したので、「次回増刷時に修正」するという回答があった。問題の直視を避ける東京書籍の回答に比べて、岩波書店のそれはさすが出版界の老舗と敬服せざるをえない回答であった。歴史学研究会は会員数二千人を超える歴史学の主導的な学会であり、この学会が従来説を改めるということは学界の定説が変わることを意味しうるという点でも、教科書の記述変更とは別に、画期的なことであった。

文部科学省での記者会見

「見直しを求める会」は令和五年度の日本史教科書が使用開始される直前の令和五年（二〇二三）三月末に記者会見を計画した。日本史教科書の記述変更のニュースはぜひとも全国の読者に読んでもらいたいという考えから、「見直しを求める会」は文部科学省の関係者の助言を得て、三月二十三日に文部科学省での記者発表を準備した。記者会見には「見直しを求める会」の代表児玉隆夫と会員の私八木と大阪公立大学関係者が同窓会から派遣された。

予期に反して、当日の庁舎一〇階での会場に現われたのは、新聞社では幹事役の朝日新聞社だけであった。他には予め情報提供しておいた関西テレビのクルーだけだった。A4三〇枚の資料を三〇部用意したのに、空振りに近い状態であった。ただ希望は、朝日新聞からは社会部・文化部の記者のほかに、編集委員の男性が出席したことであり、このことは記事になる可能性が高いことを予感させた。

記者発表は児玉代表が配布資料に沿って行った。そのあと、廊下で関西テレビによる児玉代表と私へのインタビューが行われた。

四月初旬には読売新聞大阪本社の記者からの取材を私が受けた。読売新聞は五代名誉回

復活動の途中経過を令和四年三月に報じており、その続報としての取材であった。このように朝日新聞と読売新聞から取材はあったものの、しかし、四月一〇日を過ぎても、どちらの紙面にも記事が出なかった。

相次ぐメディア報道

四月一一日の関西テレビ「newsランナー」の午後五時台に、教科書記述修正問題が六分間ほどのニュースとして放送された。翌一二日、朝日新聞朝刊の全国版に記事が出た。

『五代友厚　濡れ衣だった「汚点」　官有物払い下げ「無関係」　教科書修正』

というあざやかな見出しが躍った。（編集委員・宮代栄一）の署名入りの記事は、一〇〇行を超える本格的なものであった。「東京横浜毎日新聞」の書いた「五代らへの北海道物産のすべての払い下げ」という社説について、宮代記事は「その事実はなかった」と明快に断定し、最後には町田明広神田外語大学教授の「歴史教科書にはこれまで最新の歴史学研究の成果がなかなか反映されてこなかった。今回のことで良い流れができたと思う」というコメントを載せていた。

その一週間後の四月一九日の読売新聞夕刊に、「教科書修正」の記事が出た。

『五代友厚　140年の汚名返上　官有物払い下げ　教科書修正　大阪市大同窓生らの　働きかけ実る』

という見出しであった。記事では、「新聞が報じて」の語句を挿入する清水書院方式を山川出版社と実教出版が踏襲しているのに対して、「政府は開拓使官吏が退職して設立しようとする民間会社への払い下げを決定した」と正確に記述した第一学習社に取材がされている。同社の担当者の返答は、「ご指摘が適切と判断し、五代は関与していないことなどを明確にした」であった。

朝日新聞と読売新聞という二大紙の記事によって、「五代の濡れ衣」は社会的認知となった。《カネの亡者政商五代》という俗説の原因をつくってきた「政商五代払い下げ説」の瓦解は決定的となった。未岡照啓住友史料館副館長（当時）の五代無実を証する本格的な論文が二〇一〇年に出ているのに、一〇年以上も「政商五代払い下げ説」を書き続けてきた歴史研究者たちは、自分たちの責任に思いをいたすべきではないか。なぜなら、「利他」に生き、「青天白日、毫も天地に愧ぢず」と広瀬宰平への書状に記した先覚者五代を、恥ずべき守銭奴のように描いてきたことは、名誉毀損罪に問われてもおかしくはないからである。

なお、五月九日には産経新聞のオピニオン欄に、山上直子論説委員の署名原稿が次の見出しで掲載されて、五代無実記事はさらに広がった。

『晴れて大河に「五代様」を』

今後の課題

開拓使事件の五代が「濡れ衣」を着せられていたことが明確になった今、三つのことが課題として浮上する。

第一は、「黒田長官は破格の安値で同郷の政商五代に官有物を払い下げようとしていると新聞が報じて問題になった」という記述方式をとっている清水書院・山川出版社・実教出版の三社に追加記述の要望書を送ることである。この記述は高校生をミスリードするものである。高校生は新聞について事実を報道するものであると一般に思っているから、その文脈では、①黒田長官は政商五代に破格の安値で官有物を払い下げようとした、②それを新聞が知って報道した、③その結果、その件は社会問題となった、と理解する。すなわち、「五代への払い下げ」が濡れ衣であるとは認識することができない。こういう不十分かつ不適切な修正をもって《解決済み》と考えているのであれば、著者の研究者としての見識を疑わざるをえない。

当然、「新聞が報じて問題となった」のうしろには「ただしそれは誤報で、政府が決定した払い下げ先は開拓使官吏が退職して設立する予定の民間会社であった」が付記されなければならない。また、《様子見》の東京書籍には、速やかな記述修正を求める必要がある。

第二の課題は、五代の業績の再評価であるが、この件に言及する紙面の余裕がないので、いずれかの機会に譲りたい。

第三の課題は、五代大河ドラマ実現のための準備開始である。二〇二四年のNHK大河ドラマは、紫式部を主人公とする「光る君へ」で決定しており、二〇二五年分も内定している模様である。五代大河ドラマのありうる最も早い年は二〇二六年となる。NHK大河ドラマ「青天を衝け」の脚本を担当した大森美香氏は、大阪商工会議所が二〇二一年末に開催した講演会で、「機会があれば、五代大河ドラマを書きたい」と表明している。また、原口泉鹿児島大学名誉教授・志學館大学教授は、五代大河ドラマのNHKへの働きかけを準備している。

五代は実業人としての人生を大阪で送った「大阪の恩人」なのだから、大阪商工会議所を初めとする大阪の経済界も、鹿児島と連携する十分の理由がある。そうなれば、五代大河ドラマの実現の可能性が高まる。目標とする二〇二六年の前年には、大阪万博がある。万博で活性化された大阪を五代大河ドラマが継承する役割を担うこととなれば、大阪の近代化に尽した五代友厚とって、これほどふさわしいことはない。

五代大河ドラマの実現するときこそ、五代の名誉回復がほんとうの意味で成就すると言えよう。

大久保利通公の　五代友厚宛書簡

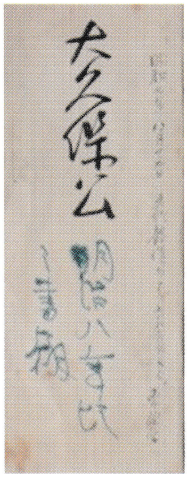
Dream 五代塾　顧問　**曾野豪夫**

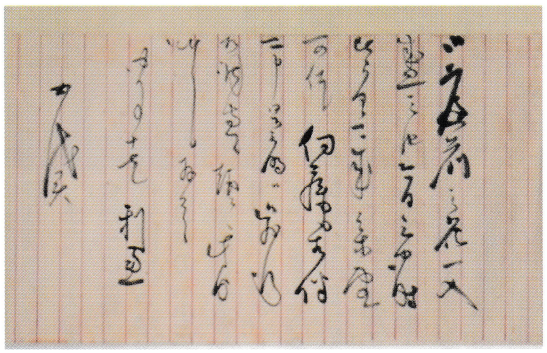
本邦初公開！

五代龍作氏から私の両親近一と慰（やす）は結婚祝いに、大久保利通公が五代友厚宛てに出状した明治八年頃の「書簡」を頂戴した。本文中に「伊藤」と大書してあるのは伊藤博文公のことに違いない。五代関係文書には収録されていない書簡である。封筒下段ペン書き「明治八年頃之書簡」という特徴ある文字は龍作氏の筆跡である。同氏は脳溢血のため右手が効かなくなり、左手で書かれたものである（永見晴義祖母談）。右端のペン字「昭和七年八月十二日五代龍作氏より之を受く。曽野生」とあるのは私の父の筆跡である。龍作氏は友厚の長女武子の養嗣子である。

五代龍作工学博士

昭和七年（一九三二）春のことであった。私の父近一（きんいち）の妹艶子は世界的美術商





昭和七年八月十二日五代龍作氏より之を受く。曾野生

大久保公　明治八年頃　之書簡

「五代龍作氏から両親が頂いた大久保利通公書簡（左）と封筒（右）」

ご庭前之　花一入（ひとしほ）
盛（さかり）之由　今日三四時
頃よ里　可成（なるべく）　参堂
可仕（つかまつるべく）候　伊藤も相伴
可申（もうすべく）　〇〇〇ハ　歩行
相調（あひととのひ）兼候趣（おもむき）に候
此旨艸々（そうそう）　拝具
四月十七日　利通
五代君

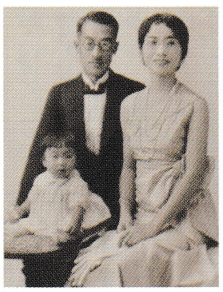
山中商会の創業者山中定次郎の一人息子と結婚して芦屋に住んでいた。私の父も両親、兄弟姉妹と一緒に近所に住んでいた。正月に定次郎が大阪の天下茶屋のお茶会で一人の婦人と同席となった。帰宅して嫁の艶子に「あんな綺麗な人を見たことがない。永見（晴・はる）さんと言って五代豊子の姪で、嫁入り前の娘さんがいるそうだ。君の兄さんの近一君とお見合いさせてはどうか」、ということでとんとん拍子に縁談がまとまった。

実は晴は大阪に住む永見省一（十八銀行監査役）の後妻だった。省一の先妻綾（旧姓宮地、私の外祖母）は五代武子藍子姉妹と従姉妹関係にあたる人だったが、大正十五年（昭和元年）一〇人の未婚の子供を残して病没した。私の母慰は翌年大手前高女を卒業した。大阪音楽学校（音大の前身）に進んでピアノや声楽を習いたかったが姉が一人、兄弟が三人、妹が五人もいるのであきらめた。次妹は音楽学校に通った。

鉱山事業を行っていた友厚の次女藍子は、母豊子（旧姓萱野）の姪である自分の従姉妹にあたる萱野晴を私の外祖父省一の後妻に推薦した。藍子はまず幼な子の末っ子の末利子（私の叔母）が晴になつくように毎週のように一緒にあちこち遊びに連れ出した。昭和四年、晴は省一の後妻となり突然一〇人の子持ちとなった。最初に嫁に出さなければならないのがのちに私の母となる慰だった。（本紙第11号「系譜」参照）

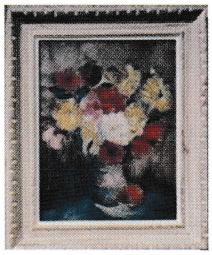
さて、豊子夫人は大正十四年に亡くなっていた。お元気なら両親の結婚式に参列された筈である。龍作氏は大阪に住んでいて忙しくしておられた。そして両親がご挨拶に龍作氏宅を訪問した時に頂戴したのがこの「大久保書簡」である。「明治八年頃」と龍作氏は書いておられるが『大久保利通日記』の明治七、八、九年の四月八日前後を調べても五代宅を訪問した記述がない。しかし大久保公の筆跡は間違いない、と思う。

両親は七年五月に結婚式を挙げ、箱根経由東京への新婚旅行をした後、日本唯一の有名な高級レジデンスホテル「夙川パインクレストホテル」に滞在した。（この建物は一九七〇年代まで残っていた。）八月、父の転勤に伴い母も一緒にメルボルンに船出した。翌八年一月シドニーに転勤となり、九月私が生れた。その年、五代龍作氏の『五代友厚傳』が発行され、シドニーの我が家の書棚に『山中定次郎傳』などと一緒に保存されていたことを記憶している。昭和十六年、日本と米英蘭との貿易が途絶したため四月戦前の家族引揚げ船で我が家族は帰国した。私達は神戸御影に住み、私は国民学校二年生に編入した。十二月八日大東亜戦争が勃発した。



1934年、89年前の筆者（左下）シドニーにて

父は、昭和十八年スルー海で乗船していた海軍徴用船鎌倉丸が米潜水艦魚雷攻撃により五分間で沈没したため海軍軍属（兼松取締役）として戦死した。二〇年六年生の八月、学童集団疎開先の鳥取県の山奥のお寺で終戦の詔勅を聞いた。日本は敗戦翌年から四～五年で物価が一〇〇倍に、そして敗戦後一〇年間で三〇〇倍となるハイパーインフレーションに襲われた。母は戦後数年間の闘病生活ののち亡くなった。幸い居宅は戦焼しなかった。母の入院療養費や弟妹ら四名の生活費と学資のため立派なお仏壇を含む全ての家財道具は売り食いし、小さな家に移ったが、これら五代、永見、山中などの書籍と大久保書簡は残してきた。この「大久保書簡」は、今は銀行の貸金庫に納めてあるので、長男や孫が大切に継承してくれることと思う。



若き日の母の油絵。
7歳年上の田村孝之介画伯に指導を受けた。
昭和3年19歳

晴義祖母には、我々小中高生の兄弟姉妹四人が住んでいる家に三～四年の間、大阪からしばしば来て貰いおさんどん、掃除洗濯の面倒を見て貰った。感謝！冬は六畳一間の真ん中に練炭こたつを置いて、お祖母さまと我々子供四人で寝たのだった。高校生～青年時代に私は、お祖母さまが「五代の伯父さん」と話されても、「五代さんが物凄く偉い人」とは分からなかった！お祖母様は、私が家族とアンカラに駐在していた昭和四十八年（一九七三）、大阪で逝去された。（享年八十二）

五代友厚の娘・武子と藍子：二人の生母勝は二条家宮侍大谷吉兵衛宗七の娘。長女武子は九里龍作を養嗣子に迎え三男二女をもうけた。次女藍子は三重県治田（はった）鉱山の経営者だった。生涯独身。（冬は大阪永見家に滞在）

大谷勝の妹八重は旧姫路藩士宮地長夫（五代経営の播磨大立銀鉱山鉱長）と結婚し、娘の綾は大立（おおだて）で生まれた。即ち綾は、武子藍子と母方の従姉妹（いとこ）関係にある。綾は、永見省一（伯父永見伝三郎創業の長崎の十八銀行勤務、のち監査役）と結婚した。私の母方祖父母である。つまり省一は、先妻（綾）も後妻（晴）も五代友厚豊子夫妻と深い縁のある人だった。なお綾は明治三十八年金蘭会（高等）女学校の創立理事の一人だった。（現千里金蘭大学）

今年、明治十四年以来一四二年振りに五代友厚の名誉回復がなされたことを皆さんと一緒に喜びたい。大久保利通も喜んでいることだろう。

往時茫々たり。

Dream 五代塾セミナー

第 8 回セミナー（講演会実施）

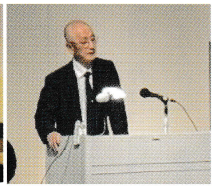
・2023年 4 月23日（日曜日）
　12時30分～16時30分
・大阪住まい情報センター・ホール
・講演テーマ
　第一部「回復された五代の名誉」
　　八木孝昌先生
　第二部「映画製作の楽しさと、人との出会い」　田中光敏監督

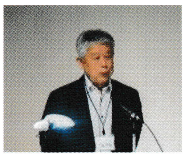
会場には北は福島、南は福岡と多方面から180名の方々の参加を頂き熱気あふれるセミナーとなりました。演者のお二人にはお忙しい中ご協力頂き、貴重な資料や写真・映像を準備しご披露頂きました。

また、市大OB会からは『新・五代友厚伝』や学生用教材の『小伝』を寄附頂き参加者にプレゼントができました。最後は堀内圭三さんによる「赤き心 -五代友厚の歌-」を歌唱、全員の集合記念写真会、更には八木、田中両氏のサイン会、記念撮影会と、時間をオーバーしての交流も出来、参加の皆さんには満足して頂けたと思います。

また、参加頂いた皆様にはトルコ大地震救援の義援金にご協力ありがとうございました。

尚、講演の詳細は、第一部は本号新聞の一、二面に、第二部は感想文をもって報告とさせていただきます。





田中光敏監督講演を聞いて

映画「天外者」公開から約二年、やっと監督の撮影に入る時の「五代友厚」や「天外者」に掛ける思い、主演三浦春馬君そして支える出演の俳優さんたちの思いを、たくさんのファンの皆様と、映像と共に聞く事が出来た。

「今だけ、金だけ、自分だけ」の現在に必要な未来に向けて語り合った幕末・維新の時代を生きた人々の話にしたいということを三浦春馬君と話し、それに応えるような演技を全力で演じ、特に終盤の会議所での演技は圧巻の出来だったとのこと。作品を観たたくさんの方々がその熱量感じる場面だったと思う。予告編を見ただけでも感動の波が幾重にも押し寄せるようであった。

監督は「この映画ではじめてファンの皆様に育ててもらうという映画の素晴らしさを感じた。本当にファンの皆様には何度お礼も申し上げてもきりがないくらいです。」と話されていた。また監督の製作に掛ける思いは充分映像で感じることができ、春馬君が場面、場面で自らの考えた五代を演じていたという話も聞くことができ、本当に素晴らしい話を聞けた時間でした。

映画製作目的は「五代友厚」という大阪の恩人、日本の恩人をたくさんの方々に知ってもらいたいということであり、その目的は達成出来つつある。これからはこの映画と共に「五代友厚公」を語り継いでいくため頑張って行きたいと思う。

田中光敏監督、スタッフの皆様、三浦春馬さん、出演者の方々、そして何よりファンの皆様本当にありがとうございました。（川口由美子）

東京講演「142年振り！五代友厚　名誉回復」

去る五月七日東京文京区に於て当塾會野豪夫顧問は「新しい歴史教科書をつくる会」東京支部の月例会で「142年振り！ 開拓使官有物払い下げ事件 五代友厚 名誉回復のための活動報告 -教科書是正という成果-」との長い演題で直近の五代にまつわる世紀の話題についてパワーポイントを使って九十分の講演をされました。来場者は教育関係者の他、五代家の姻戚十余名も参加されました。

講演の本題に入る前に去る四月十一日関西テレビの特集「大阪経済の父『五代友厚』」のDVDが、そして最後には八木孝昌作詞、歌・作曲 堀内圭三「赤き心 -五代友厚の歌-」のDVDが披露されました。

今年、五代友厚の名誉回復がなされたことを皆さんと喜びたい。

今年満九〇歳を迎えられる會野顧問は、「人生の最後となる講演が自分の外祖母の伯父伯母に当たる友厚豊子夫妻の名誉回復という嬉しい内容であり、感慨無量であった」と述懐しておられました。おめでとうございました。

編集後記はお休みします

（連絡先：川口建）
Email:gogoken12345@gmail.com
Tel: 080-4497-5688
HP:https://www.dream-godai.com